

「神は「光あれ」と言われた。すると光があった。

創世記一…三

男の子と女の子は、誰も知らない緑の園のただなかにいました。

枯れることを知らぬ無邪気な花草。根を張りそびえる雄々しい木々。どこまでも続く優しい牧場<sup>まきば</sup>。園をうつすらと翡翠<sup>かわせみ</sup>色に染める光のもや。季節が廻ることなど、一度もありません。終わることのない春です。

二人が住んでいたのは、そんな場所でした。二人しか知らない秘密の場所。ぼつりとこの世の片隅にありました。

朝になれば、陽の光が眩しく差して二人を優しく起こします。そして、近くを流れるせせらぎで寝ぼけまなこを覚ますのです。

頭上では鳥たちが滑るように羽ばたきます。誰も知らない、彼らが歌う小さな歌。どういうわけか二人だけはその歌を口ずさむことが許されていました。そんな魔法の歌を鳥たちと歌ったのなら、今日も変わらぬ一日がやって来ると思えるのです。

天高く陽が昇れば、あたたかな風が柔らかく吹きました。

そよ風にふんわりと撫でられながら、緑の牧場に二人は寝そべって、枝からもぎ取った果物を口にしつつ空を見上げます。

汚れない真つ白な雲。手を伸ばしても手を伸ばしても届かない大空に、ぼんやりと浮かんでいました。雲はかたちを変えながらあてもなく漂い、やがて淡色の大海原に消えていきます。永久とも思える時間は、そんな様子を眺めているうちに流れて、はるか彼方の地平線に陽は落ちていくのでした。

茜色の夕焼けを見届けると、一日の終わりの影が二人の園に舞い降りました。いよいよ夜闇が訪れるのです。けれども、二人は恐ろしく思いませんでした。なぜなら、いつだって二人は大きく頼もしい自然のふところに抱かれていたから。それに、夜になっても、天にちりばめられた星が瞬いて二人を淡く照らしていたから。そして何より、男の子には女の子が、女の子には男の子がいたから。二人にとって、暗闇は全く怖くありませんでした。

園の真ん中のひときわ大きな老いた木の下で、二人は眠りにつきました。身を寄せあって互いの温かさを感じているうちに、いつも男の子のほうが一足先に夢に落ちてしまします。安らかな寝顔でまどろむ男の子を膝に抱き、女の子は誰ともなしに祈りました。明日も、明後日も同じ日々が続きますように、と。

けれども、そんなささやかな願いですら神はお許しになりませんでした。一日に終わりがあるように、どんなことにも終わりがやって来るのです。

年月が巡ったある日のこと。よく晴れた暖かな日の朝、男の子はここを出ていくと告げました。

「まだ見ぬ世界を見に行くんだ」

そう意気揚々と語ったのです。もはや彼の決意は一寸も揺らぐことはありません。いつまでも待っているから、とたった一言だけ、女の子は小さく呟くしかありませんでした。

少しだけたくましくなった顔を上げ、胸を張って男の子は緑の園を去っていききました。園のことも、女の子のことも、ただの一度も振り返ることもなく。

女の子は、男の子の背中をずっと見送っていました。彼の姿が遠く彼方に消えてしまうまで。その間にも、瞳からとめどなく涙が頬を伝ってはこぼれていきました。こんなに辛いことが、こんなに虚しいことが、この世にあるのかと。これが悲しみなのだと、生まれてはじめて思い知りました。

そのとき、恐ろしく冷たい風が園に吹きました。するとどうでしょう、男の子と女の子の寝床だった巨木の一葉が、力なく地面に墜ちたのです。

女の子は、その一葉を拾い上げました。緑の生命は、もうそこにありませんでした。どうしようもなく赤茶けてしわがれた抜けがらがあるだけです。もとの緑を取り戻す術は、もはやどこにもありません。一度失われたものは、二度と戻ることはないのだ——幼い彼女の心は、そう悟りました。

《バビロンは主の手のうちにある金の杯であつて、すべての地を酔わせた。》

## エレミヤ五二・七》

どれだけ歩いたのでしよう。太陽が昇ったり沈んだりしているのを何度見たことでしょうか。長い長い旅路で、足はしびれてすくんでいうことを聞きません。昼間は容赦なく照りつける陽が肌を灼き、夜は身を刻まれるような寒さが襲います。着ているものもいつの間にかそこかしこが破れて、ぼろのようになりました。

こんな思いをするくらいなら、あの緑の園にいたほうがどれだけ良かったでしょう。今からならまだ戻れます。しかし、男の子はかたくなに歩みを止めません。それは、ひとえに「世界」を見てみたいという一心から。もうろうとする頭のなかでも、あの園のことを思い出すことはありませんでした。

それでも、やがて男の子に限界が訪れます。力は尽き果て、足元から倒れ伏しました。熱されてひび割れた地上のただなかに横たわった小さな身体。その四肢から生命が流れ出して、乾いた大地に吸い込まれていくのをひしひしと感じ取りました。ふと見やると、近くには砂に埋もれたしやれこうべや骨がうつすらと顔を出していました。自分もこんな運命を辿ってしまうのだろうか。目の前に立ちただかる黒い予感。得休

の知れない感覚に、なす術もなく恐れおののきました。しかし、ほどなくしてそれすらも感じ取れなくなりました。

しばらくして、男の子は目を覚ましました。どういうわけか、死んではいけないようです。

辺りを見渡せば、近くに一回りほど年が離れた男の人がいました。自分も旅の途中だったというその人に、どうやら助けてもらったようです。どうにかまだ生きている。そんな些細なことに、大きな安堵と喜びが押し寄せました。それと同時に、確かな自信が男の子のなかで湧き上がったのです。この生きるか死ぬかの境目を乗り越えてみせたのだ、と。

それからは、男の子は旅人と目的地を目指しました。その旅人は「世界」から来たようで、そこに辿り着くまでの道のりをよく知っていました。

男の子と旅人との出会ってから二日ほどたった日のこと。旅人が歓声を上げました。

「見よ。あれが『世界』だ」

これまでの旅で見慣れた不毛の大地にはとても似つかわないう、立派な「世界」でした。

彼方に目をやると、七つ首の獣の彫刻が見下ろす巨大な城門が立ちはだかっています。そしてその奥には、天を削り取るような塔が、林のようにいくつもそびえ立っているのが

見えました。「世界」は燃え上がるような黄金の輝きを放ち、ここからでも目が眩むような思いです。さらに、この世のものとは思えぬかぐわしい香りが漂ってきて、あたかもそこに手招きして誘っているようです。彼がさした指の先には、男の子が目指してきた「世界」が確かにありました。

「これを着るといい。『世界』の民の証だ」

門をくぐった先で渡されたのは、この「世界」の衣でした。手の込んだユリの刺繍ししゅうが施された、黄色のローブ。ぼろきれのような服を脱ぎ捨てて新たな服を着たなら、憧れの「世界」の仲間入りができた気になったのでした。

腹も減っているだろう、と「世界」の門の隣にある料理屋で食事もある舞われました。出てきたのは、脂がたつぷりのつた柔らかな肉のスープ。園の木に実っていたちっぽけな果物とは大違いです。熱く濃厚な汁が滴るその食べ物、男の子はたらふく食べました。

腹むくごしらえをすませると、旅人に連れられて街へ繰り出しました。旅人はポケットから光る石のようなものを取り出すと、門に立っている男に渡しました。すると、たちまち腰布をまとった男たちが、屋根付きの神輿みこしを担いで現れました。神輿みこしに揺られながら街道を行けば、男の子の知らなかった

景色が次々と目に飛び込んできます。

道という道は金色に舗装され、照り返した陽が目を刺しました。しかし、眩くらしがっているのは男の子だけで、他の人々は至って平気な様子です。黄金の道も「世界」の人々にとつては見慣れた光景なのでしょう。よそ者であることを悟られないように、男の子は何でもないふりをしようつとめました。

男の子と同じように、街行く人々は、男も女も一様に黄色のローブを着ています。しかし、時たま別の恰好をした女が街角に立っていました。多くの人々と違い、彼女らは半裸に近い服の上に、色とりどりの輝く装飾品をこてこてと身に付けていました。そして、道行く人々に笑顔を振りまくのです。汚きたらしいものを見てしまったとでもいうように、旅人はその様子から目を背けました。しかし、男の子は、その艶つややかな微笑みにくぎ付けになってしまったようです。その蠱惑こわく的な笑みに惹かれるあまり、時おり彼女らが浮かべる虚ろな表情には気が付いていないようでした。

そして、何より男の子の興味を引いたのが、街のそこかしこにそびえ立つ塔でした。「世界」の外からですら見えたこの塔は、一体どういうものなのでしょう。男の子が旅人に尋ねると、彼は静かに答えました。

「『勝者の塔』だ」

あの塔は、「勝者」と呼ばれる人々が持っているものだとい  
います。そして、塔が高ければ高いほど、それを持つている  
者はより強く有力な人だと見なされ、人々の尊敬と羨望を一  
身に集めます。これは「世界」においてはこの上ない名誉と  
され、高い塔を持つ「勝者」はまるで「世界」の支配者のよ  
うに振る舞うことができるということです。

「そしてこれが『敗者』だ」

旅人は、神輿を担いでいる男をあごで指しました。「敗者」  
とは、まさに「勝者」の対極にいる人々です。弱く無力で、  
誰からも顧みられることのない卑しい存在。それが「敗者」  
でした。神輿を運ぶ男だけではありません。門の近くの料理  
屋や先ほどの女など、塔を持たぬ者は皆「敗者」です。

「勝者」と「敗者」。この「世界」には、この二者しか存在し  
ないというのです。ゆめゆめ「敗者」にならぬように、と旅  
人にいわれるまでもなく、男の子は胸に刻みました。もつと  
も、彼は自分が「勝者」になるのだと信じて疑いませんでし  
たが。

「だれでも、持っている人は更に与えられ、持っていない人は持っているものまでも取り上げられるであろう。」

マルコ四・二五

緑の園とは似ても似つかぬ「世界」でしたが、男の子はすっかりそこでの暮らしに夢中になりました。

なか、ひとときわ熱中したのは旅人が使っていた光る石。この石は「世界」の民の資格がある者、つまり黄色のユリのローブを着ている者に与えられるものでしたが、これがあれば何でもできました。いいえ、決しておおげさな言い方ではありません。美味しい食べ物を食べるのも、街で遊び呆けるのも、他人をいのように使うことすら思うままです。そう、本当に何でもできるのです。光る石の魔力の前に、何も知らなかった彼の心は虜になりました。

人というものは足ることを知らぬ生き物です。やがて、与えられただけの石では満足できなくなりまして。そこで、男の子は自分の塔を手に入れることに決めました。塔を手に入れば、その高さに応じて光る石が手に入るので。

それに、彼は「敗者」ではありませんが、塔を持つ「勝者」でもありません。この「世界」では、中途半端で半人前な存在です。そのことに不満を感じていました。

塔を手に入れるためには、「勝者」と戦ってこれに勝ち、そ

の塔を奪わなければなりません。

戦う相手を探すため、男の子は街に出ます。すると、ちょうど小太りの小金持ちといった風情の男が通りがかりました。彼は、この男が戦う相手に相応しいと判断しました。見るからに弱そうなのに、自分に対する誇りだけは一丁前に持っているような男。戦うのに最もやりやすい類の人間。そんなことを見抜いて、男の子は彼を戦いの相手に選びました。

そんなこともつゆ知らず、戦いを挑まれた男は嬉々としてその挑戦状を受け取りました。明らかに未熟で、体格も華奢なちっぼけな子ども。この青二才を叩きのめして全てを奪い取ってやろう。そう考えたのでしよう。

戦いは、街の外れの「戦場」で行われました。男の子が持っているのは小さな短剣のみです。対して、相手の武器は一振りの大剣でした。鏢ぼには獅子をかたどった細工が施され、分厚い刃には優美な曲線が細やかに彫り込まれています。誰もが男の子の負けを確信しました。

小太りの男は剣を振り回しながら、男の子に向かって突進しました。長大な刃から繰り出される一撃を受けてしまったなら、薪を割るように彼の身体は真っ二つになってしまいうに違いありません。しかし、男の子は身をよじりながら、つむじ風のごとく攻撃をすばやく避け相手の背中に回り込みます。

そして、男の腕と脚の節を鋭く一閃しました。剣を落とし、四肢から血を噴き上げながら倒れる男。その身体に馬乗りになり、首筋に短剣を突き付けたのです。

こうして男の子は勝利をおさめました。これで彼も「勝者」の仲間入りです。冷めやらぬ興奮とともに、生まれてはじめての勝利の味をあじわいました。

「戦場」を後にしようとしたとき、背後から耳をつんざくような喚き声がごだましました。見れば、小太りの男が、どこからともなく現れた黒いローブの者どもに「戦場」から引きずり出されていたのでした。先ほどの戦闘の疲労もどこへやら、彼は激しい苦悶の表情を浮かべながら暴れまわっています。しかし、必死の抵抗も空しく取り押さえられました。そして、次の瞬間、彼の着ていた黄色のユリのローブ——すなわち「世界」の民の証——が剥ぎ取られたのです。腰布だけになった男は、恐ろしい絶叫と呪詛を発しながら地べたをのたうち回りました。

そんなことも意に介さないとばかりに、黒装束たちは彼のローブを奪い取ると、男の子に歩み寄ってそれを渡しました。「今日からこれはあなたのものだ。あの男の塔も財産も名譽も全て」

「敗者」は身ぐるみ剥がれ、文字通り何もかも奪い取られる。

少し前まで「勝者」だったというのに——。これこそ、「敗者」が誕生する瞬間、あるいは「勝者」が「敗者」に墮する瞬間でした。

「敗者」になった者は、どうなってしまうのでしょうか。全てを失った「敗者」は、黄色のローブを着ることも、「勝者」に戦いを挑むことも、二度と許されません。一生涯、腰布だけの「敗者」のままです。自らを殺し、輝きを失った目で「勝者」たちの道具に徹するか、ひたすら彼らに媚びへつらい続けるか。「勝者」の奴隷となって生き永らえるほかありません。生きてさえいければ雪辱を果たせる——そんな考えは「世界」では一切通用しないのです。そうした現実を受け入れられない者は、「世界」の外へと追放されました。恐らく、あの太った小金持ちもそうなのでしょう。もともと、「世界」の外には、生の絶え果てた砂漠がどこまでも続いているだけです——。

つまりは、「敗者」は人間としての一切の値打ちを失う、という事です。奪われたローブの多くは無用の長物となって打ち捨てられるか、あの旅人がしたように気まぐれで他人の手に渡るかといった結末を迎えますが、それは「敗者」として同じことでした。

「世界」は当然のように、しかし驚くほど不公平です。それ

でも、男の子はその「世界」を気に入っていました。そう、勝ちさえすれば相手の全てをそっくりそのまま手に入れられるのです。平等だったならば他人に与えられていたはずのものが、「世界」では全部自分のものになる。これほど愉快なことが他にあるでしょうか。

それに、戦いに勝てば、自らの塔をより高くすることもできました。「敗者」が持っていた塔を切り崩し、自分の塔の一部とします。戦いを重ねるほど、塔は高くなつていくというわけです。「世界」においては、高い塔を持つ者ほど誉れ高い人物であると見なされました。度重なる戦いを通して、財産も名誉も膨れ上がっていくのです。

《剣をとる者はみな、剣で滅びる。》

マタイ二六・五二

やがて、男の子は自分の塔を高くしていくことにのめり込んでいきました。初めは光る石が目当てでしたが、それだけでは飽き足らなくなつたのです。自らの名誉をひたすら積み上げていくこと。それが彼の生きがいになっていったのです。

飽くなき栄誉の探求。それがために、彼は日夜「戦場」へ身を投じ、不断の戦いに明け暮れました。いえ、もはや戦い自体が目的となつていたのかも知れません。「世界」の外れの「戦場」から毎日のように刃と刃が削り合う音が鋭く鳴り響いては、街中に轟き渡りました。「敗者」が齒軋りし泣き叫ぶ声もまたしかりです。

幾多の戦いを切り抜けて、男の子は変わっていきました。眼は鋭く吊り上がり、獲物を見据える冷血な眼差しを向けるように。口は裂けるように大きく開かれ、敵を倒すためならその身を喰いちぎることもいといません。大熊のごとき隆々たる体躯を支えるのは、鋼鉄の丸太のような両脚です。そして、手にした斧は常に「勝者」の血で燃えるように赤黒く染まっていました。もはや男の子などとは呼べません。血に飢えた獣か狂戦士か。そう呼ぶのが相応しいほどです。

彼が蹴落とした「勝者」は数知れません。あの旅人も、い



つの間にか塔の礎となりました。

彼の塔は天まで届くほどになりました。その頂きから手を伸ばせば、太陽すら掴むことができそうです。

「世界」の人々は口々に噂しました。彼こそが「世界」の王、この世の支配者となるべき者だと。

そして、誰もが心のなかで彼のことをさげすみ、恐れてもいたのです。手あたり次第「戦い」を挑んでは、全てを奪っていく略奪者。「世界」を貪り喰らう悪魔であると。しかし、彼のやっていることは何も間違ったことではありません。あくまで、これまで「世界」で行われてきたことをやっているだけです。それゆえ、次の犠牲者は自分かもしれない、とあまねく人々は恐れおののきました。

ある日のこと。突然、彼は戦いを申し込まれました。荒れ狂う王の姿に人々は恐れをなしたのか、戦いを仕掛けることはあっても仕掛けられることは久しくありませんでした。「この私に戦いを挑むなど命知らずめ」などと内心思いつつ、彼は「戦場」へ向かいました。

かたや大戦斧を担いだ異形の支配者、かたや片手に剣の挑戦者。「戦場」に立った二人の間には大きすぎる壁があるように思われました。王は勝利を確信し、敵を叩き切ろうと唸り

声を上げて突撃しようとした。

そのときです。相手が口笛を鳴らしました。そして次の瞬間、何人もの伏兵が王を取り囲んだのです。

「猛獣に死を！」

彼らは叫び、一斉に剣を抜くと、四方八方から襲い掛かりました。

王も必死に反撃を試みました。しかし、何人倒そうとも、次から次へと敵が現れます。そして、斧を振るう間にも、あらゆる方向から斬り付けられるのです。

押し寄せる剣の波。その前には、さしもの王の力も続きませんでした。おびたらしい屍の山と血の海のなかに彼は倒れ伏しました。もう立ち上がることもありません。

「暴君は倒れた」

王に戦いを挑んだ者は、小さく呟きます。そして黒いローブを羽織ると、息も絶え絶えの彼から黄色の衣を剥ぎ取り、静かに「戦場」を去りました。

小さくなっていく「勝者」の背中を、彼は虚ろに見つめました。そして、おぼろげな意識のなかで思いました。これは「戦い」ではない、一方的な「始末」だ、と。「世界」の支配者は自分などではなかった。「戦い」の終わりに必ず現れた黒のローブの男たち、彼らこそが隠された支配者だったのだと。

《鹿が谷川を慕いあえぐように、わたしの魂もあなたを慕いあえぐ。》

詩編四二：一《》

わずかに残った力を振り絞って、彼は「世界」を後にしました。塔も衣も奪われ、王の座からも追われた彼の居場所など、「世界」のどこにもありません。

ふと振り返れば、いまなお「世界」には天まで届く塔がいくつもそびえ立っていました。

けれども、彼がはじめて見た輝きは、見る影もなく失われていました。彼の瞳に映る「世界」。それは、灰色の塔たちが沈黙のうちに佇み、冷たい影を落とす世界でした。それこそが、金色の虚飾が剥がれ落ちた果てに残った姿だったのです。

この光景こそが、「敗者」の目に映る「世界」だったのだ――彼はそう思いました。「敗者」の目から輝きが失われていたのは、とりもなおさず彼らの目に映る「世界」が輝きを失ったものだったからに他なりませんでした。「勝者」と「敗者」を真に隔てるもの。それはたつたひとつ、この「世界」の姿を知っているか否かでした。この違いの前には、それ以外の相違など些末なものです。「勝者」も「敗者」も何も変わりません。一人残らず、頽廢しきったこの「世界」の住人だったのです。

「世界」を離れて、彼は生命なき砂漠をあてもなくさまよいました。

そうして辿り着いたのは、遠い遠い昔に置き去りにしたあの緑の園。彼はそこに立ち尽くしていました。

道を覚えていたわけでも、長い日にちをかけたわけでもありません。ただ導かれるように、気が付けばひとり佇んでいました。「世界」へ向かうため、あのときは十何日も何十日もかかったのに。

彼がいない間に、緑の園はすっかり変わってしまいました。園の木々は一本残らず葉を落とし、力なく枯れ果てました。

鳥たちもどこへ行ってしまったのか、その歌は黙したままです。空には灰色の雲が垂れ込め、園には淀んだ気が満ちていました。光は閉ざされ、園からはもはや生命の一切が失われていたのです。

彼はよろめきながら、園の真ん中の大きな老木へ歩み寄りました。

その幹の肌に触れたとき、彼の心の底に眠っていた何かが目を覚ましました。そう、ここが彼と、そして女の子とが共に過ごした場所だったのです。園を旅立ったあの日から、彼女は一体どうしていたのでしょうか。彼女を見つけ出そうと、彼は辺りを見渡しました。しかし、彼女の影はどこにも見当

たりません。

《疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。》

マタイ一・二一八

あの日、取り返しつかない過ちを犯してしまったのではないのか。

ここに至って、彼はようやく気づきました。思い返せば、ここに戻ろうと思えばいつでも戻ってくる事ができたはず——そう、今のよう。それでも、園のことも女の子のことも、顧みることは決してありませんでした。「世界」はみんなにも醜いものだったのに、向こう見ずな欲望や、もろく虚しいうぬぼれに溺れて、そのおぞましさに気づくことはついぞなかったのです。

そう思い知ったとき、擦り切れて乾き果てた心が一筋の涙を流しました。その流れはとめどなく溢れて、やがて彼の瞳からこぼれ落ちました。

彼は膝をつき、老いた巨木に縫すがりながら慟どうく哭しました。泣こうが喚こうが、犯した過ちはなくなりません。あの日々が戻って来ることもしありません。一度失われたものは、二度と戻ってこないのですから。そんなことは分かっています。分かっていながら、それでも、負った痛手もそのまま

に咽び続けました。

どれほどの時間が経ったことでしょう。泣き疲れて眠ってしまったようです。気だるい身体を起こして、おもて面を上げました。

そのとき、彼は驚きのあまり目を見開きました。彼の傍らには、あの日々と変わらぬ姿の女の子が立っていたのです。

彼女は来て、彼の目に手を置き、彼の手を優しく抱きました。するとどうでしょう。赤くはらした瞳の涙は残らず拭い去られ、深く刻まれた傷はたちまちのうちに癒えたのです。そして、彼は人ならざる身体から解放され、在りし日の男の子の姿へと戻っていきます。

木々の枝という枝は一斉に芽吹きはじめました。頭上では鳥たちが飛び交い、祝福の歌を高らかに奏でます。空には青い風が吹き抜け、園を厚く覆っていた雲はちりぢりになって押し流されていきました。裂けた雲間からは陽がのぞき、まばゆい赦しの光が燦々さんさんと注がれています。

そして、彼は静かに悟りました。かつて見失いかけていた真に大切なもの。求めるべきものは最初からここにあって、他のどこにもないのだと。そして、これこそがまごうことなき真理なのだ。

この世をどこまでも淡く抱擁する青い稜線りょうせんと、その膝もと

に広がったエメラルドの色彩。目の前にはたったそれだけ、他には何も映ってはいません。かつて惑いと涙とで揺らいだ視界は、もはや一点の曇りもなく晴れ渡っています。

今なすべきことは何なのか、男の子には分かっていました。女の子の手をとり、かたく力強くつなぎ合わせます。そう、二度とこの手と手が引き離されぬように。そして、横たえた身体をもたげて立ち上がり、自らの脚で大地を踏みしめました。

遠い日々、確かにあった緑の輝き。園に吹き込まれていく生命の息吹。全ては死んでいたのに生き返り、失われていたのに見つかったのです。

別れと嘆き、戦いと墮落。一度は絶たれた希望の末に、彼らは再び手を取り合いました。

陽炎かげろうのごとく揺らめく過去は今、ゆっくりとその輪郭を失っていきます。もはや二人を縛り付けるくびきは打ち砕かれ、彼らを引きとめるものは何もありません。目の前には、光に満ちたあの日々が待つのみです。

決して巡ることのない季節——果てなき永遠の春。引き裂かれることのない想いを胸に、二人はそのただなかに駆けていきました。

《悲しむ人々は幸いである。彼らは慰められる。》

《マタイ五：四》